

- 1、コヘレトの言葉の背景には、イスラエルの補囚後の状況があります。紀元前 538 年、ペルシャ帝国クロス王は、ユダヤ人たちの祖国帰還政策を取りました。民族は王ゼルバベルを先頭に帰国し、祭司エズラの指導により、前 515年にはエルサレム神殿を再建します。その後ペルシャから派遣されたユダの総督ネヘミヤは、土地を再配分し、ペルシャに納める年貢のための税金制度を作り、神殿税を整え、律法学者・祭司エズラは、律法と神殿を中心にして民族共同体の再編成を行います。その理念は「応報の神学」（正しいものは報われる）でした。「神聖法典」（レビ17-26章）「聖潔法典」（レビ11-16章）が基礎にされます（エズラ記 7章25-26節はその実態を示す）。宗教法規は、律法を守る者と守れない者を分断しました。祭司は清めの儀式を司り、病人、障害者、外国人、ある期間の女性達は不浄と見なされ、清めの儀式には高額の献げもが強要されました。神殿の関係者たちは富み、公教育は律法を徹底し、人々は生きる事に無気力ならざるを得ませんでした。時代は変わりギリシャ帝国（プトレマイオス朝）は、生産と重労働を強要し、多数の労働者の死を引き起こしました。こんな状況で、人間の現実を良く観察をし、「わたしは心を尽くして次のようなことを明らかにした」（9:1）と体制の人間破壊の現実を批判をするのがコヘレトの9章です。
- 2、万事が律法で秩序づけられる思考様式に対して、「すべてのことを悟ることは人間にはできない」（8:17）と述べます。「神は解きがたい謎である。人間が神の道を理解することはできない」。「神」が私物化され、弱者を分断差別に追い込むほどに「絶対化」されることの傲慢さへの問題提起です。詩編139:6 「その驚くべき知識はわたしを超え、余りにも高くて到達できない」。同じ一つのことが、善人にも悪人にも及ぶ、宗教的領域で、清いとが不浄をいうのもすべてが、同等なのだ。「人間は死に向かつて歩む存在である」（9:3）「死はすべての終わりである」。そこから逆に徹底して生きる事の肯定の思想が語られます。9:7-9 は、パンを食べる事、ブドウ酒を飲む事、お祭りの時の様に、香油を用い、清々しい衣服を着ること。愛する妻と楽しく生きる事、それが人生の報いだ、「あなたの業を神は受け入れてくださる」（7）という、人生そのものが神の無償の恵みでる事を語ります。働く喜びは今なのだ「手をつけた事は熱心にするがよい（死ねば仕事もない）」。コヘレトは現在を生きる事を勧めます。これは刹那的現在ではなく、無償の恵みの現在。生かされている現在。共生の自覚の現在です。「その日の苦勞は、その日だけで十分である」とのイエスの言葉を思い起こします。
- 3、私は最近、山本爽起子著『雲と火の柱－私の聖書との出会い』（コイノニア社2009/4）の出版に関わらせて戴きました。彼女は49年間終始宮崎の辺境で「今」を生きている牧師です。その中でコヘレトから得られた認識を語っている箇所「人間の限界を知って、人間を超えた私たちには隠された神の手から人生を受け取る謙虚さではないでしょうか」と語っています。